『うつほ物語』藤原季英の描かれ方について

――漢文引用、とりわけ『菅家文草』引用から見た藤英像――

佐藤信一

はじめに

『うつほ物語』に登場する藤英の描かれ方を漢文引用という観点から見て行きたい。後述するように、藤英に関する中国漢文の引用は、ほぼ『晋書』「車胤伝」と『蒙求』「孫康映雪」からの引用であるということができるように思われる。

藤英、藤原季英に関しては、従来、中村忠行氏の「藤英のモデル―『宇津保物語』の素材研究の一―」[注1]における橘直幹准拠説や、石母田正氏の「藤英のことなど」[注2]の「作者の問題を作品の内側の問題としてとらえるとき、まず誰でも念頭にうかぶのは勧学院の学生藤英のことであろう」とする指摘や、上坂信男氏の「藤原季英」[注3]での「苦学生」であると共に「懸想人」である両面性を持っており、人物設定の意図は「本来の崇高な目的を見失った学制を批判的に客観的に描くこと」であったとする観点、また片桐洋一氏の「源氏物語の源泉 I 物語 うつほ物語の場合」[注4]における「帝をはじめとして、漢学を尊び学者を尊ぶということは、いわば現実離れの理想の世界として描いて」おり、また「この物語の作者は、大学時代、文章生の時代から、表面に出たいと絶えず思いながら果たせなかった漢学者であろう。大学の、特に博士たちと、その背後にある権力者に対する怨念が、この物語の部分部分に、そのままに残っているのである」と言った見解、いわば作者像と藤英を直結させる見方が大勢を占めるものと言えよう。また、室城秀之氏の「拒否される求婚者たち―行正・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって」[注5]では「孤の存在として学問・技芸によって成り上がってゆこうとする」、いわば「拒否される求婚者」として「『うつほ物語』そのものの本質と密接に結びついている」と論証する。秋山虔氏の「日本文学史における一条朝」[注6]では「『文士』たちのありあまる才学がただ無用の状態でこの社会に淹溜していた」ことが「『うつほ物語』の藤英の物語の語られる土壌」であったとする。さらに佐藤厚子氏の「うつほ物語の「学問」―藤原季英の人物像を中心に―」[注7]では、「新たな学問の意味と学者の姿とを表している」ものとして藤英の人物像を捉え、正頼家の婿となるために学才を披露したとする。その点では藤英も他の求婚者と変わるところはないと捉える。

ただ何故藤英がそのような描かれ方をしたのか、またそう描

く事によって物語作者は何を語ろうとしたのか、という問題は避けて通れまい。今回は「祭の使」巻の藤英の叙述のあり方、そこで語られる漢籍引用の方法を中心に、探ってみたい。

先取りして言えば、藤英の叙述には、ある特定の漢籍が繰り返し引用されるようである。しかも、その引用は、物語のある一つの場面に収斂されるという特徴を持つ。それでは、同じ漢籍の故事、表現を繰り返し引用することによって、藤英はいかに形象されているのであろうか。叙述に即して見て行きたい。またこの故事の享受も『うつほ物語』作者のみによってなされたものではあるまい。そこには『うつほ物語』作者もその一員だった学問の場があったことが推測できよう。そこではこれらの中国に淵源を持つ故事が詠じられ合い、賦され合い様々な表現を織り上げていったのである。それらの叙述とも『うつほ物語』は関連を持っているのではないか。今回は『晋書』「車胤伝」と『蒙求』「孫康映雪」を引用した表現、及びそれらを引用した日本の漢詩文、その中でも菅原道真が弟子達の進士への及第を祝った『菅家文草』巻二「賀二諸進士及第一」の叙述との関係の検討を通じて、『うつほ物語』における漢籍引用の問題を炙り出そうと思う。

一　『晋書』「車胤伝」の場合

A　かくて、勧学院の西曹司に、身の才もとよりあるうちに、身を捨てて学問をしつつ、はかりなく迫りて、院の内に、すげなく、せうかう・雑色・厨女、言ふことも聞かずかはやいて、まれまれ座に着けば、院の内笑ひ騒ぎて、日に一度、短籍を出だして、一笥の飯を食ふ、院司・鎰取、「藤英がはてへの捻り文」と笑はれ、博士たちに、いささか数まへられず、父・母、筋・族、一度に滅びて、はかりなく便りなき学生、字藤英、さくな季英、歳三十五、かたちこともなく、才かしこく、心かしこき学生なり。

かかる心にも、思ふ心あり。「いかで」と思ふに、ある衆、藤英、かく、はかりなく迫るを見て、「こともなき男なりや。右の大将殿も、かばかりの婿は、え取り給はじかし。容面・才はありがたしや」など、これかれうち笑ふを、藤英、紅の涙を流して、「恥づかしく、悲し」と思ひて、夏は、螢を涼しき袋に多く入れて、書の上に置きて、まどろまず、まいて、日など白くなれば、窓に向かひて、光の見ゆる限り読み、冬は、雪をまろがして、そが光に当てて、眼の穿ぐるまで学問をし、「こくばく斎はれ給ふ妙徳、学問の力に、恥救ひ、願ひ満て給へ」と、心の内に祈り申しつつ、身の沈むことを嘆きつつあるに、院より出でたる人の、旅籠振るひの饗する日、曹司に、雑色を使にて、「今日、座に奉れ。忠遠、座にまかり着きたる日なり」と言はす。藤英、「はなはだかしこくかしこし、召し数まふること。入学して、今年二十余年、いまだ、左右の念に預からず。たまたまかり着きし昔、身の恥厚かりしによりてなり」と言はす。曹頭進士、夏の衣の破れたる、朽葉色の下襲の困じたるを取りに遣りて、かく言ひやる。

夏衣わが脱ぎ着する今日よりは見るなる恥も薄くなりなむ

藤英、紅の涙を流して、

恥をのみ八重着る衣に脱ぎ替へて薄き衣に涼みぬるかなとて返す。曹頭進士、台盤一つが盛り物、藤英が曹司に遣る。皆、これに詩ども作れり。

（『うつほ物語 全』祭の使二二六～二二七頁）[注8]

ここは、物語に初めて藤英が紹介される場面である。漢籍の引用箇所が集中している。だがそれにも拘わらず笑われる対象として描かれていることに注意しておく。なぜここで藤英は笑われるのであろうか。それは「螢」の光で学問を行うという修辞に他ならないことを、言葉は悪いが馬鹿正直に行っているからであろう。そうした言語レベルにすぎないことを実際にすることで、藤英は笑いの対象となっているのではないだろうか。

「身を捨てて学問をし」ているのに、「はかりなく迫」って、窮迫していた。しかも、雑色や厨女といった人々は藤英の「言ふことも聞か」ない。座に着くと「院の内笑ひ騒ぎて」、一日一回、短籍、くじ引きに用いるために短い紙の札に字を書いてひねったもの、を出して「一笥の飯」にありつく。その上藤英の短籍は「『藤英がはてへの捻り文』と笑はれ、博士たちに、いささか数まへられ」なかったのである。それは「父・母、筋・族、一度に滅び」てしまったからではないか。

そのような藤英にとって、ただ一人の理解者といえるのが、曹頭進士の忠遠であった。忠遠は藤英が着る着物もないので、着物を与えて、台盤いっぱいに贈り物をよそって届けるのであった。忠遠と藤英との友情は、また後で検討する。

つまり藤英がいくら「才かしこく、心かしこき学生」であったとしても、「はかりなく便りなき学生」以上のものではないのである。そのような藤英にも「思ふ心」があった。あて宮への恋心である。しかし藤英はその外見、「はかりなく迫る」様子から「うち笑」われる。外面しか問題にされていないのである。「容面・才はありがたしや」とある「は」に注目すべきであろう。この「容面」とは顔かたちの義の男性語である。また「才」は、漢籍に対する学識、ここは頭でっかちの知識人のひけらかしと言ったニュアンスで用いられているのであろう。その二つは滅多にないほどである、とする。この評価は本末転倒とも言うべきものであろう。藤英の形象に「才」を認めない社会に対する異議申し立てが籠められる。藤英の形象が、そのような異議申し立てと密接に絡まってなされることに注意される。「こともなき」と形容されていた容貌と「才」、学問の才能は素晴らしい。だがそんなものは何にもならない。嘲笑の対象にしかならないのである。

ここで物語の語り手は何を訴えようとしているのであろうか。それは、藤英が信じていた学問の限界ではなかったか。

以下の叙述は、車胤・孫康の螢雪の故事による表現で特徴づけられる。物語の中で現在のこととして叙述されていることに注意しておく。「夏は、螢を涼しき袋に多く入れて、書の上に置きて、まどろまず、まいて、日など白くなれば、窓に向かひて、光の見ゆる限り読み、冬は、雪をまろがして、そが光に当てて」に、『晋書』車胤伝「家貧不二常得一レ油、夏月則練嚢盛二数十螢火一務以照レ書、以レ夜継レ日焉」、『蒙求』孫康映雪「康家貧無レ油、常映レ雪読レ書」であるとか、「眼の穿ぐるまで学問をし、

…」に、『白氏文集』海漫々「眼穿不万見夢蓬萊島務」に対する天永四年点「眼は穿（うぐれ）ども」が引用されていることは諸注の指摘にある。古い注釈では、山岡明阿『二阿抄』にも「学の窓に螢を集は西土の故事なり雪をまろかしけんもまた同じ蛍雪の功労などもいへり。」とある。

もちろんこうは言っても、「学問の力に、恥救ひ、願ひ満て給へ」とあるように「恥」からの救済と「願ひ」が満ちることと言う藤英自身の俗物性と、切っても切り離せないものであったかもしれない。ただ、これらの引用は藤英に関する叙述の中で繰り返されているのである。車胤の故事の引用の繰り返しに何か意味が見出せるのではなかろうか。

B　［ここは、勧学院の西、藤英が曹司。藤英、文机に向かひて、書ども、巡りに、山のごと積みて、虫、袋に入れて、書の上に置きて、太き布の帷子一つを着て居たり。厨女、黒き強飯笥に入れて、黄菜の汁して持て来たり。／これ、東曹司。自由の学衆ども、着き並みて、酒・肴召し、院司・雑色、集ひてののしる。政所の別当ども、着き並みたり。米、数知らず積み置きたり。／大炊殿。男、御膳す。長女・厨女あり。「藤英が膳夫、庭のみたさう」と言ひて、はいかへり。／これ、座に着きたる進士・秀才らの学生、合はせて八十人ばかり、台盤に向かひて、物食ふ。旅籠の御饗したり。紙ども配る。厨女、しはりかけてうつ。」

（祭の使二二七頁～二二八頁）

次に絵解である。「みたさう」、「はいかへり」「しはりかけてうつ」は語義未詳の箇所である。「みたさう」は御短籍、「はいかへり」は笑ひあへりの転訛かとされる。藤英は曹司で、机に向かって、布の帷子だけを着て座って、蛍の光で本を読んでいる。車胤の故事を実際に行っているのである。この実際に行っていると言うところに力点がありはしないか。そして藤英の食事は「黒き強飯」「黄菜の汁」である。「黒き強飯」とは玄米であろうか、粗末なものであることは疑いない。黄菜とは大根の若芽のこと。藤英の質素な生活の叙述たり得ている。それと対照的に描かれるのが、「東曹司」の「自由の学衆ども」の「酒・肴」及び、「米、数知らず積み置きたり」という叙述ではないだろうか。こう描くことで、藤英の貧しさ・惨めさをより一層効果的に象っていると言えよう。

ところで、破線部の「虫」とは、「袋に入れて、書の上に置きて」とあるのだから、『晋書』「車胤伝」の「数十螢」のことであろう。時間としては現在のことと叙述されている。つまり藤英が車胤の故事を今現在行っていることになる。またここでは、地の文で「車胤伝」の引用がなされている。ここからも藤英が故事に語られたのに過ぎないことを愚直なまでに行っている姿が浮かび上がる構造となっていよう。このように繰り返される「車胤伝」の引用が、藤英の形象に大きな位置を占めているのではないだろうか。そしてその形象とは、書物に書かれたことを生真面目に行う愚直な若者というものではないか。

C　あるじのおとど、藤英に問はせ給ふ、「誰が後として、誰

が職に侍る学生ぞ」と問はせ給ふ。季英、「遣唐の大弁、南蔭の朝臣の一男として、料賜はれる文屋童に侍り。南蔭の左大弁、参議に侍りしほど、兵のために命終り、兄弟、遠く、残る屍なく滅び果てて、季英一人なむ、かれが後とて侍る。三月のあいれしゑひはする輩、一生一人なし。七歳にて入学して、今年は三十一年、それよりいくそばく、眼の抜け、臓の尽きむを期に定めて、大学の窓に光ほがらかなる朝は、眼も交はさずまぼる、光を閉ぢつる夕べは、叢の螢を集め、冬は、雪を集へて、部屋に集へたること、年重なりぬ。しかあれど、当時の博士、あはれ浅く、貪欲深くして、料賜はりて、今年二十余年になりぬるに、一つの職当てず。兵を業として、悪を旨として、角鷹狩・漁に進める者の、昨日今日入学して、黒し赤しの悟りなきが、贖労奉るを、序を越して、季英、多くの序を過ぐしつ」と、そこばくの博士の前にて、紅の涙を流して申す。聞こし召す人、涙を流し給はぬなし。あるじのおとど、「この学生、かく申すは、いかなることぞ」と問はせ給へば、博士ども聞こゆ。「季英、まことに悟り侍る者なり。されど、しが魂定まらずして、朝廷に仕うまつるべくもあらず。これまかり出でたらば、公私妨げとあるべきによりて、えせず侍るなり」と申す。季英、爪を弾き、天を仰ぎて候ふ。大将のおとど、「さ侍る者か」と、あまねく問はせ給ふ。心を合はせて静むる中に、曹頭進士、「ただ今、氏の院に、魂定まり、身の才すぐれたる者、これのみなむ侍る。人のために、犯し・過ち、一期一生なし。身の便りなきを怠りとして、かう、ただ、院内すげなくして、私豊かに、悟りなき学生どもには、豊かに賜へれども、季英が、便りを失ひ、学問に疲るるをば、一度の職行ふ恐れて、つかれふすることなし。跡を絶ちて籠り侍る学生なり」と申す。おとど、「大学の勧学院といふものは、大臣・公卿より始め奉りて、封を分け、荘を入れ、賜ばりを置きたる所なり。大学の道に、かく、贖労といふことあらむや。高家としてある正頼だに、殊にせぬことなり。皇女たちの御賜ばり、数あまたあり、みづからも、一往賜はる。かかれども、家に功ある者に賜ひて、あまるをこそ、料物奉るには賜べ。季英が申すごとくには、朝廷に仕うまつりぬべき者にこそあなれ。堪へたることなき人だに、身の沈むをば憂へとすることを。ことわりなりや。貧しきを怠りにせば、正頼こそは交じらはざらましか。魂に於きては、身の憂へある時、公私に愁へをなし、よき人も静まらず。こと叶ふ時に、はふあくの者も修まりぬるものなり」などのたまふ。博士たち、かしこまりて候ふ。

（祭の使二三一頁～二三二頁）

藤英の美声に感心した正頼が藤英に生い立ちを尋ねる場面である。正頼の問に藤英の答が嚙み合ってないことが注目されよう。藤英は正頼の問に対して、問わず語りのように自家の歴史、さらに自己の生い立ちを語る。そこでの藤英の語りの中で車胤の故事が語られるのである。「七歳にて入学して、今年は三十一年、それよりいくそばく、眼の抜け、臓の尽きむを期に定めて、大学の窓に光ほがらかなる朝は、眼も交はさずまぼる、光を閉ぢつる夕べは、叢の螢を集め、冬は、雪を集へて、部屋に

集へたること、年重なりぬ。」は繰り返される引用である。ここで「眼の抜け」、また「眼も交はさずまぼる」と、「眼」が繰り返し語られることに注目したい。とりわけ「眼も交はさずまぼる」は、「眼の穿ぐるまで」の変奏と捉えられないか。

「眼も交はさずまぼる」と対をなす「光を閉ぢつる夕べは、叢の螢を集め、冬は、雪を集へて、部屋に集へたること、年重なりぬ」が、いわゆる車胤・孫康の螢雪の故事、『晋書』「車胤伝」の「家貧不二常得一油、夏月則練嚢盛二数十螢火一以照レ書、以レ夜継レ日焉。」や『蒙求』「孫康映雪」の「康家貧無レ油、常映レ雪読レ書。」に基づくものであることは、認めてよかろう。

また藤英に関して「魂」が問題にされる。「博士ども」が藤英を「魂定まらずして、朝廷に仕うまつるべくもあらず」と、藤英を誹謗する。その中傷に対して藤英は指弾して天を仰ぐしかない。博士たちに対して、忠遠は「ただ今、氏の院に、魂定まり、身の才すぐれたる者、これのみなむ侍る」とする。この叙述で「魂」が「身の才」と並列されていることに注意すべきであろう。学識と対になるものなのである。ここでの「魂」とは、心の働き、精神、思慮分別の義であろう。藤英の「魂」、思慮分別が定まっているか、いないか、が問題にされている。「博士ども」が藤英の外面しか見ていないのに対して、忠遠は藤英の学問の内実を知っているのである。その両者の主張に対して、正頼は直接「贖労」、売官の話を問題にする。さらに正頼は、「魂」は「身の憂へある時」、沈倫したときには優れた人も落ち着かず、何か成就する時には、「はふあく」（暴悪カ）の者も修まるとする。このように述べることによって正頼が藤英の「魂」を称揚していると考えられないだろうか。

D 色深く染むるまにまに□□□袖や紅葉の錦なるらむ

中将仲忠、宇治の網代より、

ながれ来るひを数ふれば網代木によるさへ数も知られざりけり

初雪の降る日、涼の中将、

雲居より袂に降れる初雪のうち解けゆかむ待つが久しきおとど、見給ひて、「九月に仰せられしを思ひたるなめりかし。景迹なる人にあれば、かしこをば、人にこそ頼み聞こえたれ」などのたまふ。

侍従の君、時雨いたく降る日、

神無月雲隠れつつ時雨るればまづわが身のみ思ほゆるかな

源少将、祭の使に立つとて、

袖ひちて久しくなれば冬中に振り出でて行くとふかあふやと

兵衛佐、物に参るとて、□□物語などす。帰る暁に、御前の池より水鳥の立つを見て、

我一人帰れる池に鴛鴦の□□□□鳴きて立つかな

藤英、「六十余日が内に対策せむ」と、夜昼急ぐ。年ごろ、雪を夜の光にて勤めつれど、今は、さとゐん□□花のごとし、食物山のごとし、油は海のごと湛へて、□□□□などするにも、なほ、このことを嘆く。雪降る日、

心だに明かくなりにし雪降れど恋には惑ふものにぞありける

（吹上・下二九八頁①）

「吹上・下」巻末である。ここは、欠字があって意味の通じにくい箇所であるが、藤英の叙述「年ごろ、雪を夜の光にて勤めつれど」やその独詠歌「心だに明かくなりにし雪降れど」に、『蒙求』「孫康映雪」「康家貧無レ油、常映レ雪読レ書。」の影響が見られるのではないか。「油は海のごと湛へて」という叙述も孫康の「家貧無レ油」を裏返しにしたものと見ることが出来るのではないか。それから「食物山のごとし」から想起されるのは最初に見た「祭の使」の「日に一度、短籍を出だして、一笥の飯を食ふ」という叙述である。このように繰り返し引用することで、『うつほ物語』作者は何を語ろうとしているのであろうか。また、叙述の部分は、地の文であるが「つれ」と完了の「つ」を使うことで、藤英の行動に寄り添った叙述になっていよう。さらに、独詠歌では「心だに明かくなりにし」と過去の「き」を用いることで、藤英自身の過去の体験を示す表現であると言えよう。要するに現在の栄華の時にあっても、この故事を引用することによって、藤英は過去の一点、刻苦勉励した時代に常に立ち帰るように形象されていると言えるのではないか。

E　律師、山籠りの御声のいと尊きを聞き愛でて、かはらけ取りて、かく申し給ふ、

　出づとせし身だに離れぬ火の家を君水尾にいかですむらむ

山籠り、

　煙立つ家は思ひの苦しさに身も消ちがてら入れる水尾

大将、

　ここにかくあるどち誰か燃えざりし袖の水脈にも温みやはせし

中納言、

　人よりは我ぞ煙の中なりし今も消えねどえやは出でける

弁殿、

　夜を暗み螢求めしわが身だに消えし思ひの目に煙りつつ

中将、

　燃えわたる火のほとりにはありながら乾かぬものは袖にぞありける

などのたまひつつ、遊び明かし給ふ。

（国譲・下七七三〜七七四頁）

この前に作文が描かれている。趣深い句は皆で朗誦する。「右大弁の御声はいと高う厳しう」と美声であることが語られる。その後、皆で和歌を詠む場面である。忠こそが「出づとせし身だに離れぬ火の家を君水尾にいかですむらむ」と火宅を詠み込んで、仲頼が「煙立つ家は思ひの苦しさに」と応じ、仲忠は「燃えざりし袖」と、涼も「煙の中」、「今も消えねど」と応じる。藤英の後に詠じた行正も「燃えわたる火」とする。藤英は「消えし思ひ（火）」、「煙りつつ」と言葉の上では答えていながら、「螢求めしわが身」と『晋書』車胤伝を引用することで学生としての独自性を出していると言えよう。しかも、それは何度も引用を重ねた故事によってなされているのである。また「消えし」とするのは何が消えたのだろうか。それは「思

ひ」、あて宮に対する恋心ではなかったか。それが消えてしまったとするのである。しかも、「求めし」、「消えし」と直接体験を示す「き」を用いることで、あて宮への思いが消えたと言うことが、他ならぬ藤英の体験であることが示されていよう。

F 右大弁の殿の御方、式部大輔かけたれば、この頃、「非時せむ」とて、大学の衆らの車あまた立つ。徳、いとかしこし。世に重く思はれ、人に許されたり。学士なりしかば、今も、帝、御心に御書入れ給へれば、常に御前に候ひて、いと時なり。奏することも、いととく聞こし召す。かたちも、いとものものし。北の方に聞こゆるやう、「昔、氏の院に、鶴脛・裸にて、上に居つつ、書の見ゆる限りは参らで、夜は螢を集めて学問をし侍りし時に、心地、常に面白く頼もしく、思ふことなく侍りし。今、かう朝廷に仕うまつり、かかる御仲に候へど、もの思はしうわびしうなむ。それは、かう見奉る限り、親にも対面し給はず、世には心も行かぬやうにて経給へば、生きて侍る効なむなき。『つたなき人につき給へり』とて、親を勘事し奉るなむ、僻みたるやうなる。おとどは、御前去らず召し使ひ給ひ、公事につけても思ほし数まへたり。御前をも、かくてこそ思し召し顧み給ばめ。いとあぢきなき御物恥なり。世の中は、はかなきものぞや。藤壺の、昔より名立たり給ひて、多くの人をいたづらにしなし、宮仕へをし給ふとては、傍らほとりに人寄せ給はず、すなはちより子を生み給ひしかば、坊・后がねとののしられ給ひしかど、音もし給はず。思ひかけざりし人の、昨日今日うち生み出だし給へるこそは、あめれ。かかれば、かくはなやかに見給ふらむ人々はかなうなりて、季英人々しくならむとも知らず。『勧学院の藤英』と言はれ侍りしかども、上達部の端にまかりならずや。博士とて侍る人、侍らぬをぞ思ひ侍る」と聞こゆれど、いらへもし給はず。

（国譲・下七八〇頁～七八一頁）

藤英が妻であるけす宮に自己の半生を語る場面である。「夜は螢を集めて学問をし侍りし時に、心地、常に面白く頼もしく、思ふことなく侍りし」に『晋書』車胤伝の投影を見て取ることは容易い。しかしその藤英の「学問」も、けす宮には理解不能だったのであろう。けす宮は「世には心も行かぬやうに」思っていることが藤英にはありありと判るのである。「つたなき人につき給へり」と親に訴えるけす宮には何を言っても通じない。正頼の信頼の厚さを言っても、藤壺、あて宮の孤閨を言っても、同様である。ここでは藤英の信じた「学問」も、彼の孤独を救うよすがにはならなかったのである。

ところで、この場面でも「学問をし侍りし」と「き」が用いられて、藤英の体験した過去の叙述であることが明らかにされる。では、藤英はいったいいつのことを回想していたのか。その過去とは最初に見たA「祭の使」の「夏は螢を…」でのことであろう。つまり、藤英は常に「祭の使」での刻苦勉励していた頃という過去の一点を回想するように形象されているのではないだろうか。要するに藤英は、「学問」をして沈淋した境涯から這い上がろうと努めていた過去を常に回想して生きるよう

に形象されていると言えよう。

ところで『晋書』「車胤伝」が引用される箇所がもう一つある。それは「内侍のかみ」での朱雀帝が俊蔭女の顔を見ようとして「童部や、候ふ。螢、少し求めよや。かの書思ひ出でむ」と言う。「かの書」とあることで『晋書』の引用であることを明らかにする。しかし、これは螢の光で女の顔を見ようとするもので、藤英の場合とは全く異なるので、ここでは考察の対象から除外することにする。

またこの故事が王朝の文人にとって自家薬篭中のもの、むしろ陳腐なものとも見られることについては、例えば、文章では『本朝文粋』[注9]巻三、九〇「文章得業生正六位上行播磨少掾大江朝臣挙周対」「照芸藉於北窓之雪、…秋螢功積、車司徒之位高昇。」、巻五、一二〇菅原道真「同第三表」「天資浅薄、簪以螢雪之末光。」、藤英のモデルとも目されている橘直幹の巻六、一五〇「請被特蒙天恩兼任民部大輔闕状」「弱冠之初、入虎鶴而問風教、壮年之際、依螢幌而畳歳華。」、紀在昌の巻九、二六四「夏夜於鴻臚館餞北客」「若予者、久積丹螢之光、未入白鳳之夢。」がある。

詩の用例を挙げておくと、『菅家文草』[注10]巻二、八六「傷巨三郎、寄北堂諸好事。」の五・六句「悲栽家上新生樹、哭放窓頭舊聚螢」は好学の士であった巨勢親王の死を悼む詩である。親王が没したため学問をする人もいないので、集めた蛍も放してしまおうと叙述している。同じく、一三七「絶句十首、賀諸進士及第。(九)」「一経不用満塵金、況復螢光草逕深」は大系が「子孫にかごいっぱいの黄金をのこしてやるよりも、一つの経書をのこして勉強させる方が、真に子孫のためになる」としているのは、「蔵開上」の仲忠の蔵開きによる俊蔭の書物の発見などが想起される例である。この詩、及びそれを含む十首については後述する。また巻五、三八二「仲春釋奠、聽講論語、同賦爲政以徳。」の起句承句「君政万機此一経、乗龍不忘始收螢」も、宇多天皇が即位しても、学問に励んだ昔を忘れないとしたもの。後集、五〇九「燈滅二絶」(二)の起句承句「秋天未雪地無螢、燈滅抛書涙暗零」は、配所での学問を継続することの困難を語ったもの、大系は「雪」も「蛍」も「秋天」だからいない、つまり「ちょっとしたしゃれである」とするが、もっと重い意味を持つであろう、などがある。また道真の師であった島田忠臣『田氏家集』[注11]巻下、二〇一「及第作」「秋帳螢不見階、春天射鵠箭無乖」もある。

二　『菅家文草』巻二「絶句十首、賀諸進士及第。」との関係

ところでこの『菅家文草』巻二「絶句十首、賀諸進士及第。」を川口氏は藤英と関連づけて、「うつぼ物語に描かれる「藤英」的人間像の形象がある」と述べている(『平安朝日本漢文学史の研究(上)』「菅原道真の作品および思想の特質」)。ここで川口氏の説を跡づけてみたい。

菅原道真の「絶句十首、賀夢諸進士及第務。」は以下のような作品である。先取りして言えば、弟子達の学業を詠んだ詩を通して、他ならぬ道真自身の学問に対する思いが吐露されているのである。

絶句十首、賀諸進士及第。

129 七七頽齡是老生
誓云未死遂成名
明王若問君才用
更幹差勝風月情
賀丹誼。

七七の頽齡是老生
誓ひて云ひしく死なじ遂には名を成さむ
といひき
明王若し君が才用を問はませば
更幹差勝りなまし風月の情

130 無厭泥沙之曝鰓
場中出入十三廻
不遺白首空歸恨
請見愁眉一旦開
賀和平。

泥沙に鰓を曝すことを厭はずして
場中に出入すること十三廻
白首空しく歸らむ恨みを遺さず
請ふ見よ愁眉の一旦に開くことを

131 當家好爵有遺塵
不若槐林苦出身
四十二年初及第
應知大器晚成人
賀橘風。

當家の好爵遺塵有り
若かじ槐林に苦に出身するには
四十二年初めて及第す
應に知るべし大器晚成の人を

132 初有二毛更六年
此朝筋骨可神仙
知君大學能常住
願使諸生競見賢
賀中義。

初めて二毛有りてより更に六年
此の朝筋骨は神仙なるべし。
知んぬ君が大學に能く常に住れることを
願はくは諸生をして競ひて賢を見さしめんことを

133 親老在家七十餘
每看膝下淚漣如
登科兩字千金直
孝養何愁無斗儲
賀野達。

親老いて家に在り七十餘
看る每に膝下に淚漣如たり
登科の兩字千金の直
孝養何ぞ愁へむ斗儲無きことを

134 人共賀君我獨傷
曾知對策若風霜
龍門此日平三尺
努力前途万仞強
賀田絃。

人は共に君を賀し我は獨り傷む
曾知りき對策風霜の若くありしを
龍門此の日平なること三尺
努力めよや前途万仞強

135 少日偏孤凍且飢
長呼孔父濟窮兒
還家拜世何爲檄
手捧芬芬桂一枝
賀多信。

少き日偏に孤にして凍い且飢ゑたり
長に呼ぶ孔父の窮れる兒を濟ふことを
家に還り世を拜して何ぞ檄を爲さむ
手に捧ぐ芬芬たる桂の一枝

136 此是功臣代代孫
神明又可祐家門
況爲進士揚名後
今待公卿採擇恩
賀和明。

此れは是れ功臣代代の孫
神明また家門を祐くべし
況むや進士名を揚げてより後
今や公卿採擇の恩を待たむや

137 一經不用滿湮金
況復螢光草逕深
業是文章家將相
朱衣向上任君心
賀二右生一。

一經用ゐず湮に滿つる金
況むや復た螢の光の草の逕に深からむや
業は是れ文章家は將相
朱衣向上君が心に任さむ

138 龍有名駒鳳有雛
行程自與世人殊
聞君舍弟皆家業
次第當探海底珠
賀二橘木一。

龍に名駒有り鳳に雛有り
行程 自らに世人と殊ならむ
聞くならく君が舍弟皆家業なりと
次第に當に探らむ海底の珠

一二九番詩では、「七七頽齢」、四十九歳という相手の学生の年齢を「老生」と叙述する。だがその学生は「死」を拒絶して「遂成レ名」そうとするのである。この「名」とは藤英の追い求めたものでもなかったか。そしてこの「明王」に正頼を当て嵌めれば、まさしく藤英の場合と同じである。

一三〇番詩の「曝レ鯉」は、『藝文類聚』「竜部」に引く「三秦記」に「河津、一名竜門。大魚集二竜門一下数千。不レ得レ上。上者為レ竜。不レ上者、故云レ曝レ鯉二竜門一」に拠るもので、試験に落第すること。試験に落第することが「十三廻」にのぼったというのである。だが「愁眉」も「一旦」に開く。ここに藤英の「身を捨てて学問をしつつ、はかりなく迫」った姿を見て取れないだろうか。

一三一番詩の「遺塵」は、祖先が残して置いてくれたものの意、『文選』巻六、左思「魏都賦」に「列聖之遺塵」とある。「槐林」は三公の集まるところの義。ここでの「出身」とは、文章生から文章得業生となって、対策に合格して任官することである。「四十二年初めて及第す」という時間の叙述に、藤英の「七歳にて入学して、今年は三十一年、それよりいくそばく、…」（祭の使二三一頁）が想起されよう。

一三二番詩「初めて二毛有りてより更に六年」は潘岳の故事（潘岳「秋興賦」序「晋十有四年、余春秋三十有二、始見二二毛一。」）を引いて三十八才になったことを述べるもので、先程見た藤英の年齢の叙述が想起される。また、「君が大學に能く常に住れる」とは、それこそ蛍の光で学び、眼が穿るまで学問に励む藤英の姿に他なるまい。また「諸生をして競ひて賢を見さ」せるというのも、藤英のその後の栄達を考慮に入れると納得がゆく。

一三三番詩は老いた親に対する孝心が主題であるように見える。ただ、「登科の兩字千金の直」からは藤英の俗物性が連想されないであろうか。第四句、本来『晋書』「王歓伝」「雖家無斗儲、意怡如也」に基づく「孝養何ぞ愁へむ斗儲無きことを」の「斗儲」に、川口大系は「宇津保物語にみえるように雑色厨女にもさげすまれるような「窮まれる大学の衆」の生活が背後にうかがわれる」とする。ここにも藤英の叙述との関わりがうかがえる。

一三四番詩は初句に、及第を賀して「人は共に君を賀し我は獨り傷む」とあるが、この「獨り傷む」の「獨り」と、藤英が自ら生い立ちを述べる「南蔭の左大弁、参議に侍りしほど、兵

のために命終り、兄弟、遠く、残る屍なく滅び果てて、季英一人なむ、かれが後とて侍る。」（祭の使二三一頁）との間に、表現の類似を見出せるのではないだろうか。また第二句「曾知りき対策風霜の若くありしを」は、藤英にとって苦しかった「曾」を物語るものではないか。[注12]

一三五番詩の「少き日偏に孤にして凍い且飢ゑたり」は「父・母、筋・族、一度に滅びて、はかりなく便りなき学生」という藤英の在り方と見合うものではないだろうか。ここに物語と漢詩文との重ね合わされる可能性を見て取ることは出来ないだろうか。

一三六番詩では「況むや進士名を揚げて後」とあり、『孝経』「開宗明義抄」に「立レ身行レ道、揚二名於後世一、以顕二父母一、孝之終也」に基づくとされているが、この「名」は、「祭の使」の「藤英は、文人も、かくたより詩奉るにも、御前にて作り出だしたる詩は、上達部見給はむに名高くなりぬべければ、講師、取り隠して、読まずなりぬ、上達部・親王たち、あるものとも知り給はず。」（二三〇頁）や、「菊の宴」の「恥を捨て、名を顧みず出で立ちて、時の上達部に見え知られしかばこそ、いささか浮かみ、人ともなれ。」（三二五頁）といった叙述と関連があるのではないか。さらに「公卿採擇の恩」とされるが、ここからは「あるじのおとど、聞こし召して、「今日の詩に聞こえざりつる句を、一人誦する人あなり。誰ぞ」とのたまふ」（祭の使二三一頁）、藤英の声を聞き分けた正頼が想起されよう。

一三七番詩の二句「況むや復た螢の光の草の逕に深からむや」に『晋書』「車胤傳」が踏まえられていることは認められよう。

一三八番詩の二句「行程自らに世人と殊ならむ」は、道真の詩では「龍」や「鳳」の子供であれば、他と違うの謂いであろうが、「世人と殊」なる「行程」とは、藤英の人生そのものではないだろうか。

藤英に直接繋がるのは一三七の「螢光」のみかもしれない。しかしながら、この一連の詩はいづれもどこかで藤英の形象に結びついていると言えるのではないか。ただ単に「螢光」の類似に留まらない、道真によって描かれた道真周辺の学生群像の生き方をも取り込んだ引用になっているものと考えられる。従来漢詩文の影響というと単語レベルに留まっていたという感は否めない。しかし、これらの詩文の訓読文と『うつほ』の行文の類似を見るとき、訓読文が物語の表現に及ぼした影響を改めて考える必要がありはしないか。そこに「蔵開・中」の「果てに、一度は訓、一度は音に読ませ給ひて、「面白し」と聞こし召すをば誦ぜさせ給ふ」（五三四頁）が思い起こされることは言うまでもない。道真及び他の漢詩人たちの詩の訓読が仮名文学に及ぼした影響は奥深いものがあったのではないだろうか。

まとめ

ここで論じてきた事柄を纏めておこう。藤原季英、藤英の叙述に当たって、漢籍の果たした役割には非常に大きなものがあった。「海漫漫」のような装飾、飾りとしての故事引用も見られた。ただそれとともに、いわば反芻される故事引用として『晋書』「車胤伝」の記事があった。またそれらの漢籍と仲立

ちしたものとして菅原道真の表現、『菅家文草』巻二「賀諸進士及第」の一連の詩が考えられると思う。そこでは道真の弟子達の及第に到るまでの苦節が車胤伝を始めとする漢籍の故事を用いて象られているのである。さらに言えば、「車胤伝」の記事は藤英の過去のある一時期と密接に結びついていたのである。藤英が繰り返し用いる「螢」の故事は、その故事を叙述することで、過去のその時に回帰する機能を果たしていたのではなかったか。その上、藤英の場合の特徴として、『白氏文集』にせよ、『晋書』にせよ、大げさで滑稽なものになっていることが挙げられると思う。また漢詩文の引用は集中して用いられる傾向があることも見て取れる。そして『うつほ物語』の漢籍引用の特徴の一つとして、藤英における「車胤伝」のような人物造形と関わる引用があるのではないかと思われる。ただ、その人物造形と関わる引用も『菅家文草』の表現を間におくことで一層理解しやすくなるものであると言うことが出来よう。このように中国の故事と物語との媒介項として菅原道真に代表される日本漢文の表現、及び訓読を想定し得ると思われる。

注

1 『天理大学学報』三二輯、昭和三七年六月

2 『日本古典文学大系月報』63、昭和三七年一二月刊

3 『古代物語の研究―長編性の問題―』昭和四六年三月、笠間書院刊

4 『源氏物語講座』第八巻「諸本・文体・語法」昭和四七年三月刊

5 『うつほ物語の表現と論理』平成八年一二月刊、初出は『日本文学』昭和五六年二月)

6 『国文学』三四巻一〇号、平成元年八月

7 『椙山女学園大学短期大学部二十周年記念論集』平成元年十二月刊

8 室城秀之氏著『うつほ物語全』平成七年十月、おうふう刊。以下本文の引用はこれによる

9 『本朝文粋』の本文は大曽根章介・後藤昭雄・金原理氏校注『本朝文粋』平成四年五月岩波書店刊、に拠る。

10 『菅家文草』の本文は川口久雄氏校注『菅家文草・菅家後集』昭和四一年一〇月岩波書店刊、に拠る。なお訓読は「あたう限り平安初期の古訓に近づくべく努力した」とされる同書の訓にほぼ依拠した。訓読文の「うつほ」への影響を視野に入れんがためである。

11 『田氏家集』当該詩の本文は小島憲之氏監修『田氏家集注　巻之下』平成六年二月和泉書院刊、に拠る。

12 今回は取り上げなかったが、道真は後に讃岐に左遷された折に「得故人書、以詩答之」(巻三、一九〇)に於いて「努力君心能努力、存亡應在此文章」と「努力」の語を用いていることに注意しておく。今は論証する暇はないが『菅家文草』の他の詩にも藤英の形象につながる表現はまだ少なからず在ると思われる。それらの検証はまた他日を期することにする。

※本稿は平成十一年度国文学研究資料館共同研究の成果の一部である。

(本学助教授)